



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1848年の革命とチャアダーエフの逆説 : バーリンのチャアダーエフ像への反論として
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 21, 55-81
Issue Date	1976
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5062
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113031.pdf



1848年の革命とチャアダーエフの逆説

——バーリンのチャアダーエフ像への反論として——

外 川 継 男

(I)

ピョートル・チャアダーエフの生涯と思想に関しては、多くの研究者を悩ませてきたいくつかの問題がある。そしてその中の一部は現在では明らかになったが、しかしいまなお判然としないいくつかの問題も残っている。

伝記の上の問題に関していうならば、(1) チャアダーエフの生年の問題¹⁾。(2) デカブリストの結社に加入していたか否かの問題²⁾。(3) 『テレスコープ』に発表された『哲学書簡』(第一書簡)の翻訳者が誰であったかという問題³⁾。(4) 生涯を独身ですごした彼の女性関係⁴⁾。(5) たえず借財に悩まされていた彼の経済的生活と兄ミハイールとの関係⁵⁾、といったのがその例である。

さらに彼の思想については、(1) ドイツ観念論哲学(とくに個人的にも会って、文通もしたシェリング)と、フランスのカトリック哲学および伝統主義(ボナルド、バランシュ、ドゥ・メーストル、シャトーブリアン、ラムネー)の彼の思想形成に与えた影響の問題⁶⁾。(2) 1820年代の神秘哲学への傾斜の問題⁷⁾。(3) スラヴ主義者(とくにホミャコフとイワン・キレエスキー)との思想的相互影響の問題⁸⁾。(4) 『哲学書簡』から『狂人の弁明』へいたる思想的变化ないし発展の問題⁹⁾。(5) アダム・ミツキエヴィチとの思想上の類似点とその解釈の問題¹⁰⁾。(6) チャアダーエフにおけるカトリシズムの本質的意味の

- 1) 1792年, 1793年, 1794年, 1796年という四つの説がある。現在でも一部の研究者は1793年説をとっているが(例—L. Schapiro, *Rationalism and Nationalism in Russian Nineteenth Century Political Thought*, New Haven and London, 1967, p. 39) 大部分は1794年説を採用している。
- 2) 拙稿, 「チャアダーエフ『哲学書簡』—翻訳と解説—」『スラヴ研究』No. 7 (1963), 116-121頁参照。
- 3) 拙稿, 『スラヴ研究』No. 6 (1962), 68頁参照。
- 4) とくに『哲学書簡』執筆のきっかけを作ったパノーフ夫人とチャアダーエフを愛しつづけて未婚のまま1835年に死んだアウドーチャ・ノーロヴァ(——チャアダーエフは彼女の墓の傍に埋葬されるよう遺言し, これは実行された——)との関係。
- 5) この点は以下によって前よりも大分明らかになった。R. T. McNally, *Chaadayev and His Friends*, Tallahassee, Florida, 1971. (以下単に McNally, *Friends* と略記する。)
- 6) 本論 77頁参照。
- 7) 本論 56~57頁参照。
- 8) ホミャコフとの関係については, Cf. McNally, "Chaadaev versus Xomjakov in the Late 1830's and the 1840's." 《*Journal of History of Ideas*》, Vol. 27 (1966), No. 1, pp. 73-91. キレエフスキーとの関係については拙稿「『哲学書簡』から『狂人の弁明』へ」木村彰一編『ロシア, 西欧, 日本』(1976, 朝日出版社) 321-338頁参照。
- 9) 前注拙稿参照。
- 10) Cf. W. Lednicki, *Russia, Poland and the West*, N. Y., 1954, (Reissued in 1966), pp. 28-59.

問題¹¹⁾。(7) スラヴ主義と西欧主義のコンテクストでとらえる19世紀ロシア社会思想史上のチャアダーエフの位置づけの問題¹²⁾。(8) ゲルツェン、ミハイロフスキーから人民主義者へとつながるチャアダーエフの「後進性の有利」の思想の継承の問題¹³⁾。(9) そして最後に、はたしてチャアダーエフは革命家と呼ばれるべきなのか、それともリベラルな改革を志向していたのか、という問題がある¹⁴⁾。

このことは一つにはチャアダーエフの思想がオリジナルで緻密である反面、きわめて非体系的で、とらえどころのないところからきている。しかしそれだけではない。もう一つは彼の生涯と思想を明らかにする資料が、研究史の上できわめて数奇な運命の下に刊行され、さらにいまなお未発表のものがアルヒーフ（レニングラードの科学アカデミー・ロシア文学研究所——プーシキンスキー・ドーム——）の中に眠っていることにも由来している。周知のように、チャアダーエフは1836年に『哲学書簡』を発表したあと、一切自分の執筆したものを発表することが禁止された。彼の主要な論文と書簡が公刊されたのは、死後50年余を経て1905年の革命後、1913年から14年にかけてのことである¹⁵⁾。この記念すべき仕事をなしたゲルシェンゾンは、資料収集の作業をすすめる過程で、これより前の1908年に最初の本格的伝記¹⁶⁾を著わしたが、この伝記と著作集はある意味で致命的な欠陥を持っていたために、その後の研究者にとって多くの誤解と困惑とを起こさせるところとなった。というのはこの著作集の中にゲルシェンゾンは四編の『哲学書簡』を収めたが、これは1928年にシャホフスコイによる新たな五編の『書簡』の発見により、ロシア語に翻訳された上で訂正され補充されて、1935年に『文学遺産』の第22-24巻に発表された。これによって先にゲルシェンゾンによって収録されたチャアダーエフの著作集の中の第二、第三書簡は実は第六、第七書簡であり、しかも第四書簡とされていたものは本来『哲学書簡』には入らぬ別の論文であることが明らかになった。さらにシャホフスコイは、ゲルシェンゾン版にチャアダーエフの外遊中の作品として収められた《Memoire sur Geistkunde》なる断章が実はチャアダーエフの著作ではなく、彼の友人たるモスクワの医師オブレウーホフのものであることも明らかにした。ところでこの作品はゲルシェンゾン

- 11) この問題についてはカトリックの学者（ガガーリン、ケネー、ファルクら）とギリシャ正教の学者（ベルジャーエフ、ゼンコーフスキーら）との間には、当然とはいえ大きな対立がある。
- 12) この点についての新しい解釈は McNally, *Friends*, pp. 225-227 参照。（これは西欧主義者を Westerner と Westernizer に二分し、後者は前者と異なり、ロシアの後進性を自覚した上で、西欧文明の成果を吸収しつつも、ロシアには独自の発展の道があると考えた人びとで、チャアダーエフはこのグループに入るという。）
- 13) この点についてマックノーリーは、① かかる後進性は短期的に克服できると考える者 (Westerner) と、② より長期的に見て、それがロシアの未来にとってプラスの要素となり得ると考える者 (Westernizer とスラヴ主義者) とに分類し、1890年代のマルクス主義者はほとんどすべて ① であったが、レーニンは無意識的に ② の考えを継承した anti-Westerner にして最高の Westernizer であったという。そして革命前のロシアの現実の下では Westerner 運動は、デカプリストからメンシェヴィキに至るまで崩壊せざるを得ない運命にあったと説明している。ibid., pp. 229-230.
- 14) Cf. McNally, *Friends*, pp. 199-217.
- 15) *Сочинения и письма П. Я. Чаадаева, под. ред. М. Гершензона, I-II, М. 1913-1914.* (以下単に *СП* と略記する。)
- 16) М. Гершензон, *П. Я. Чаадаев : жизнь и мышление*, Спб., 1908.

が書いた伝記においてはきわめて重視されたものであって、彼の主張するチャアダーエフにおける「社会的ミスティシズムの理論¹⁷⁾」の資料的根拠となるものであった¹⁸⁾。

シャホフスコイはさらに同じ『文学遺産』の中に『1848年のペー・ヤー・チャアダーエフの檄文の未完の草稿』なる新資料を発表しているが、本論において問題にするのはこれである。そのほか彼は同じ1935年に『文学遺産』の第19-21巻にも二つの資料を公刊している。一つは1826年にチャアダーエフが外国旅行から帰国した際、国境で当局にデカブリストとの関係を取り調べられた折の調書であり、もう一つは本論で取上げるところの1847-48年のチュッチェフあての二通の書簡である。最後に彼は『ズヴェーニャ』の第3-4巻(1934)にもチャアダーエフの最後の論文というべき1854年1月15日付の一文をロシア語に訳して公刊し、さらに同誌の第5巻(1935)に未刊の三通の手紙(1840年と42年のガガーリン宛の二通と、単に4月15日付とあるシェリング宛の一通)をフランス語の原文とロシア訳に解説を付して発表している。

しかし上述の如き形で発表された新資料は、1930年代という学术交流のもっともとぼしかった時代に公刊された故もあって、一部のごく限られた専門家にしか利用されることなく、多くの研究者は依然としてゲルシェンゾンの伝記と著作集に依拠しつつチャアダーエフの生涯と思想を論じてきたといえよう。以下に見るように、アイザイア・バーリンのチャアダーエフ像も、もっぱらこの上に作られたものである。

しかしてこのような状況が破られ、外国の学者がソ連のアルヒーフを利用できるようになったのは1960年代になってからであり、『哲学書簡』と『狂人の弁明』のオリジナルなフランス語のテキストが初めて発表されたのは、ようやく1966年のことである¹⁹⁾。この仕事はアメリカ学者レイモンド・マックノーリーによってドイツの学会誌『東欧史研究』(1966, 第11巻)に公刊されたが²⁰⁾、その後1970年にフランスの研究者フランソワ・ルーローによってもマニエスクリプトにもとづく『哲学書簡』と『狂人の弁明』のオリジナルなフランス語のテキスト²¹⁾が刊行された。さらにマックノーリーは多くの未刊の資料(そのほとんどは手紙)を用いて1971年に研究²²⁾を著わし、ルーローもまた先述のチャアダーエフの最後の論文のオリジナルなテキスト²³⁾を1974年に公刊した。

17) Гершензон, Указ. соч., стр. 93.

18) 筆者も誤ってこれをチャアダーエフの作品として扱った。(拙稿『スラヴ研究』No. 8 (1964), 133-134頁。)

19) したがってファルクの独訳も、筆者の和訳も、第二～五、第八書簡に関してはシャホフスコイの露訳から重訳されたものである。またコイレなどフランスの研究者はこの露訳を仏訳するといったある意味で無駄な努力を強いられてきた。H. Falk, *Das Weltbild Peter J. Tschadaajews nach seinen acht "Philosophischen Briefen,"* München, 1954, p. 10. A. Koyré, *Etudes sur l'histoire de la pensée philosophique en Russie*, Paris, 1950, pp. 54 et suiv.

20) 同誌34-117頁。なお彼は1969年に英訳も出版しているが、奇しくも同じ年に同じアメリカの女性研究者ゼルジンもアルヒーフを利用し、マックノーリーが『東欧史研究』に発表したテキストの誤りを正して英訳の形で出版した。R. T. McNally, *The Major Works of Peter Chaadaev*, Notre Dame and London, 1969. Mary-Barbara Zeldin, *Peter Yakovlevich Chaadaev, Philosophical Letters & Apology of a Madman*, Knoxville, 1969.

21) Pierre Tchaadaev, *Lettres philosophiques adressées à une dame, présentées par François Rouleau*, Paris, 1970.

22) McNally, *Friends*.

23) 《Cahiers du monde russe et soviétique》Vol. 15, Nos 3-4, pp. 409-413.

(II)

これらの新資料の刊行によってチャアダーエフ研究はより詳細になり、従来疑問とされていた点も次第に明らかになってきた。ところでチャアダーエフの生涯と問題点の一つに彼の1848年の革命に対する態度がある。この点についてイギリスの政治思想史家のアイザイア・バーリンは1948年に発表した「ロシアと1848年」と題する興味ぶかい論文²⁴⁾の中で、この時のチャアダーエフの姿をつぎのように描いている。

「チャアダーエフは自由主義者ではなかったし、ましてや革命家ではなかった。どちらかといえば彼はローマン的保守主義者であり、ローマ教会と西欧の伝統の讃美者であって、スラヴ主義の東方正教会とビザンツについての固定観念に対する貴族的反対者であった。彼は左翼ではなく右翼的な人物であったが、体制に対する公然たる、且つ恐れを知らぬ反対者でもあった。彼は何よりもその個人主義、確固たる意志、汚れなき純粋さと性格的強さ、そして権力におもねることを誇りをもって拒否することによって、人びとから賞讃されていたのであった。1848年にこの西欧文明の勇敢な擁護者は突然ホミャコフに手紙を書きヨーロッパは無秩序に陥っており、ロシアの援助を深刻に必要としていると記し、そしてハンガリー革命の粉碎における皇帝の大胆なイニシアティブについて多大の熱意をこめて語った。これは当時多くの知識人が感じていた民衆蜂起に対する恐れに帰せられるかも知れないが、話はこれで終らない。1853年にゲルツェンはチャアダーエフについて熱烈な讃辞をこめた一冊の書を国外で出版した。このことを耳にするやチャアダーエフはただちに政治警察の長官に手紙を書き、自分がかくも悪名高き外道によって賞讃されたことを迷惑にも思い、憤慨していると述べた。そしてそのあと、神の意志によって世界に秩序を回復すべく派遣されたツァーリに対するこの上なくへりくだった忠誠の感情を被瀝しているのである。驚愕したある友人に対して彼は、所詮人間は『みずからの命を惜しむものだ』とだけ述べた。当時のロシアにおいて、もっとも誇り高く、この上なく自由を愛する人物におけるこのようなシニカルな自己卑下は、たまたまシベリア送りや絞首台をまぬがれた一世代前の貴族の反逆者に対する執拗な抑圧の効果を悲劇的に証明するものである²⁵⁾」。

この文章の最初のチャアダーエフの特徴づけに対しても、今日の研究からみると、そこに異論がないわけではないが、本論で筆者が特に問題にしようとするのは、バーリンが以上の記述の中で1848年の革命に対するチャアダーエフの態度をあきらかに一面的に評価しているということである。

まずはじめに、ここでバーリンが言及しているホミャコフへの手紙からみてゆくこととする。これは1849年9月26日付のものであって、バーリンがこれを1848年としているのは誤りである。しかしてこの書簡の全文は以下の如きものである。

「バスマンナヤ²⁶⁾、9月26日。誰かは知りませんが、貴方にお渡しするようにといっ

24) I. Berlin "Russia and 1848", *The Slavonic and East European Review*, Vol. 26, pp. 341-360.

この論文は最近、今井義夫氏によって邦訳され、解説と注を付けて発表された。I. バーリン「ロシアと1848年」、『知の考古学』, No. 4 (1975), 122-130頁, No. 7 (1976), 121-136頁。

25) I. Berlin, *op. cit.*, pp. 354-355. 今井氏訳, 前掲誌 No. 7, 128頁参照。

26) チャアダーエフが借りていた邸のあったモスクワの通りの名前。

て私に送ってきたノートを、貴方にお送りします。これほど見事に貴方の気持を表現しているからには、この慇懃な筆が誰の手になるものか貴方にとって想像に難くないことと思います。なぜこの作者が自分の心情を吐露したこの文章を貴方に伝達する人物として私を選んだかはわかりません。しかし彼が私のことを貴方のよき友であると考えていることに対しては感謝しています。勿論、追記も手紙も一人の才能ある人物の手になるものです。この追記からみますと、彼は私が自分と同じ思想の持ち主だと考えていることがわかりますが、この点では間違っていない。いわゆるヨーロッパ²⁷⁾で起っていることに対し、私は彼に劣らぬ嫌悪を感じています。また未来がその勇敢さを立派に示している民族のものであることを、彼に劣らず確信しています。この民族のいちじるしい特徴は、勝利にあってもおごり高ぶることなく、高潔であることです。そしてこのことは現在かくも見事に示されています。しかしただ一点、彼に同意できない箇所があります。それは、われわれはヨーロッパにかかざりあうことなく、ヨーロッパのことはヨーロッパ自身にまかせるべきだ、という点です。反対に私は、われわれがヨーロッパについて配慮することが現在必要であり、いまやかかざりあう必要が大いにあると考えています。われわれに新しい名誉ある勝利をもたらした人²⁸⁾も、多分このように考えられたことでしょう。この手紙の筆者が、もしわれわれがヨーロッパにかかざりあわないなら、われわれはハンガリーに行くこともなく、その反乱も鎮圧²⁹⁾されなかつただろうし、ハンガリーはロシア皇帝の足下にひれ伏すこともなかつただろうということに、どうして気付かなかったのか、私にはわかりません。またどうして彼が、寛大な総督も現在大変な困難な状況に陥っていたかも知れず、また貴方たちの共通の友人³⁰⁾も非常に不幸な目にあっていただろうということ、そして最後として、われわれも勝利の中にみずからの謙遜な態度を示す機会を持たなかつただろうということが察せられなかつただのか、私にはわかりません。貴方の尊敬すべき共鳴者が、ヨーロッパがわれわれを妬んでいると知っている点では私もまったく賛成です。そして、もしヨーロッパがわれわれのことをもっとよく知り、どれほどわれわれが国内で幸福に暮しているか見たとしたら、ヨーロッパはなお一層われわれのことを妬むようになることでしょう。しかし、だからといってヨーロッパのことはヨーロッパにまかしておくべきだということにはなりません。ヨーロッパの敵意がわれわれから私たちの崇高なる使命、即ち秩序を救い、諸国民に平和を回復させ、われわれ自身が為している如く彼らもまた権力に服従するということ——一言で申せば無秩序に陥った世界にわれらの救世的原理を教えるという使命を奪うことがあってはならないからです。私はこの点について貴方が私とまったく同意見であり、ロシアが天上と地上のツァーリによって示されたみずからの使命を拒否することは望んでいないと信じています。私は貴方が今日ただ単に西欧の国々に主の恩寵を求めるだけでなく、われわれと同盟している兄弟たちに更にその他の幸せをも望んでおられるとさえ思っています。

27) 強調原文。以下同様。

28) ニコライ1世をさす。

29) パスケーヴィチ麾下のロシア軍がコッシュートの指揮するハンガリー軍を最終的にくだしたのは、1849年8月1日(新暦では13日)のことである。

30) 女性の友人、ヨーロッパのことを皮肉な表現でいつているのか？

最後に私はわれらが主教の最近の言葉から以下の一文を引用せざるを得ないという、やみがたき気持をわれ知らず感じております。

『たとえわれらが神の道にあるといえども、われらの目論見でみずからの道高めんとすることは、神の道から外れることになる³¹⁾。』 敬 具³²⁾』

一読してわかるように、この手紙はたまたまチャアダーエフがある未知の人物から手紙を送られ、それをホミャコーフに渡すよう依頼されて筆をとったものである。したがって、バーリンのいうように「突然ホミャコーフに手紙を書き」というのは必ずしも当たらない。すでにケネーによって扱われ³³⁾、最近ではクリストフ³⁴⁾やマックノーリー³⁵⁾が新しい資料にもとづいて主張しているように、チャアダーエフとホミャコーフの間には、通常考えられるよりも密接な思想上の交流があった。チャアダーエフはこの手紙よりも三年前の1846年に友人のフランス人、アドルフ・ドゥ・シルクール伯に手紙を送り（この内容については本論の最後においてみる）、前年『モスクワ人』誌に掲載されたホミャコーフの論文「ロシアについての外国人の意見」をみずから仏訳して、これをフランスの雑誌に掲載するよう依頼しているほどである³⁶⁾。彼がスラヴ主義者の中でも特にホミャコーフを高く評価していた事実は、ゲルツェンも『過去と思索』の中で述べている³⁷⁾。

このハンガリー反乱の鎮圧に対しては、ホミャコーフもまたその必要性を認めていたが、同時に世論がこの干渉戦争に必ずしも好意的ではないことを知っていた³⁸⁾。彼は1848年の革命に対しては、「政治的憎悪」より「精神的憎悪」を抱いており、一方では「ゲルマン的・ローマ的腐敗³⁹⁾」がポーランドやボヘミアのスラヴ人にまで及ぶことを危ぶんでいたが、このような革命的傾向に対する根本的対策は政府よりも、むしろロシア社会と個人のイニシアティブにもとづくべきだと考えていた⁴⁰⁾。そしてチャアダーエフもこのようなホミャコーフの考えは十分に知っていたものと思われる。それだからこそ上述の如き手紙を読んだとき、その内容がホミャコーフの見解にきわめて近いことにただちに察しがついたのであろう。

この手紙の中でチャアダーエフが自分の意見として主張しているのは、第一に、ロシアは世界に秩序を回復させるというみずからの使命を果すために、積極的にヨーロッパに働

31) これは1849年8月22日モスクワの府主教フィラレートがウスペンスキー寺院でなした説教の中の言葉である（シャホフスコイの注）。

32) *СП*, I, стр. 289-290.

33) Ch. Quénet, *Tchaadaev et les lettres philosophiques*, Paris, 1931, pp. 301 et suiv.

34) P. K. Christoff, *An Introduction to Nineteenth-Century Russian Slavophilism, Vol. I, A. S. Homjakov*, The Hague, 1961, pp. 48-60.

35) McNally 前掲論文。

36) *СП*, I, стр. 268-275.

37) А. И. Герцен, *Собрание сочинений в тридцати томах, Т. IX*, М. 1956, стр. 147. (以下この版については巻数と頁数のみ示す。) 金子幸彦訳『過去と思索』I. (筑摩書房, 1964) 349-350頁。

38) *Полное собрание сочинений А. С. Хомякова, Т. VIII*, М. 1904, стр. 191 (1849年ボポフあて手紙)。

39) 《Русский Архив》1884, кн. IV, стр. 319, См. А. С. Нифонтов, *Россия в 1848 году*, М. 1949, стр. 149.

40) Christoff, *op cit.*, p. 94.

きかけるべきだということと、そして第二として、しかしこの行為はあくまで謙虚な気持からなされねばならず、ヨーロッパのロシアに対する反目を惹起してはならないという二点である。われわれはこのような見解を後にチュッチェフにあてた1848年の手紙の中でも見るであろうが、まず当面のところは、以上の如き見解がチャアダーエフの信条をいつわったものでは決してないということを確認して論を先へ進めよう。

つぎにゲルツェンとの関係についての第二のエピソードを検討することにする。ゲルツェンの『ロシアにおける革命思想の発達について』は1850年に執筆され、1851年の1月から5月にかけてドイツの雑誌⁴¹⁾に掲載されたあと、同年6月21日ニースからフランス語の原文が出版された⁴²⁾。パーリンが1853年といているのはこの年ロンドンで出版された第二版(増補改訂版)のことである。しかしチャアダーエフは1851年にすでにこの書物について聞いており、パーリンの述べている「政治警察の長官」たるアレクセイ・オルローフ伯への手紙も1853年ではなく51年に執筆されたものである。しかしチャアダーエフの甥であるジハリヨーフの語るところによれば、チャアダーエフがゲルツェンのこの著作について耳にしたのは、まさに当時の憲兵長官にして第三部長官たるオルローフその人からであったというが、この人物はチャアダーエフと親交のあったデカブリストのミハイール・オルローフの三歳年上の兄であって、デカブリストの蜂起を鎮圧した功績により伯爵に叙せられた。以後ニコライ皇帝のもっとも信頼あつき片腕として、1844年から56年迄秘密警察たる皇帝官房第三部の長官を勤め、その後外交面でも活躍し、首相にもなっている。弟がデカブリストの一員として逮捕されたにもかかわらず、シベリア流刑をまぬがれたのは、もっぱらこの兄の皇帝への取りなしによるといわれているが、弟ミハイールはすでに1842年にチャアダーエフに見守られながら死んでいる⁴³⁾。したがって、チャアダーエフと兄アレクセイ・オルローフとの関係も、一般の要注意人物と秘密警察の長官というふうに割り切れるものではない。パーリンが述べているこの時のチャアダーエフのオルローフあて書簡の全文は以下の如きものである。

「アレクセイ・フョードロヴィチ伯様。ゲルツェンの書物の中に、かつて一度たりとも私の意見ではなく、また今後とも私のものたりえぬ見解が私のものとして書かれているのうかがいました。閣下のお言葉からして、閣下がこの厚顔なる中傷を格別重要視されておられないと知ってはおりますものの、この中傷が閣下に何らかの印象を与えるかも知れないと危ぶまずにはおれません。もし閣下がこのことについて私に反論することを許され、その反論……多分それはこの書物全体に対する反論となりましょうが……を書面で呈出する機会をお与え下さいますならば、幸甚に存ずる次第です。そのためには、この書物自体が私には必要であり、それは閣下の手より借用する以外に方法がありません。

すべてのロシア人、すべての皇帝に忠誠な臣民たちは、神が皇帝にヨーロッパの秩序を救うようにとの使命をお与えになられたと見ており、たとえ微力ではあってもこの崇高な

41) 《Deutsche Monatsschrift für Politik, Wissenschaft, Kunst und Leben》。

42) А. И. Герцен, VII, 412, 419.

43) Л. Я. Павлов, *Декабрист М. Ф. Орлов*, М. 1964 および *Советская историческая энциклопедия*, Т. 10, стр. 616-617 参照。

使命の一翼をになうことを誇りとすべきであります。厚顔なる逃亡者が真実をみにくい形に歪め、自分自身の気持をわれわれのものとし、自分自身の不面目をわれわれに向って投げつけているのを、どうして放置できましようか？

閣下が私の願いをその寛大なお心に受け入れられ、たとえ私の願いをお許しにならなくとも、閣下の御好意の変らぬことをあえて望むものであります。敬 具⁴⁴⁾」

ここでチャアダーエフが言わんとしていることは、第一に、ゲルツェンが自分の意見の如くその書物の中で述べていることは、伝え聞く限り、まったく自分の見解ではないということと、第二として、ヨーロッパに秩序を回復せんとするロシアの使命は、神がツァーリに与え給われた崇高な任務であって、すべての忠誠なロシア人はその遂行に微力を尽すべきと考えている、という二点である。しかし全文の調子には、必要以上の自己卑下が見られる。そしてチャアダーエフ自身にとってもながくこの手紙が心にひっかかっていたと見えて、この夏モスクワを訪れたオルローフ伯に手紙を送ったあとそのコピーを甥のジハリョーフにも見せた。一読したあとジハリョーフが彼に、どうしてこのような「いわれなき卑屈さ (*bassesse gratuite*)」を示したかと問いただしたのに対し、チャアダーエフはコピーを大事そうに、いつも身につけている小さな書類入れにしまいながら、しばらく沈黙したあとで、「君、人は命を惜しむものだよ (*Mon cher, on tient à sa peau.*)。」といったという。

このエピソードは1871年に『ヨーロッパ報知』の9月号にジハリョーフがはじめて紹介したものであって、ゲルツェンゾンの伝記にもチャアダーエフの著作集にも出てくる有名な逸話である⁴⁵⁾。

しかしこの時の手紙を理解するためには、チャアダーエフとゲルツェンの関係と、当時のきびしい国内政治の事情を一応頭に入れておく必要がある。ゲルツェンとの関係については、以下にやや詳細に見るとして、先に国内の状況について一瞥しておこう。

1848年の革命が起こるや、ニコライ一世はオルローフの進言にもとづいて、二月末に検閲を強化するための特別委員会の設置を命じた。オルローフ自身は文学にはまったく興味がなく、作品など「なに一つ読んだことがない」人物であったが、第三部の仕事に検閲が今後ますます重荷となることを予想し、特別委員会の設置を皇帝に進言したのである⁴⁶⁾。ブトゥールリンを長とし、彼の名を冠してその後「ブトゥールリン委員会」と呼ばれたこの悪名高い特別委員会⁴⁷⁾の下で、この時から「検閲テロの時代」が始まり、それは1855年のニコライ一世の死にいたるまで続くことになる⁴⁸⁾。しかしてこの委員会の強化は、1833年以来文相の地位にあったウヴァーロフを退位に追いやり (1849年10月)、ニキチェンコらリベラルな傾向の検閲官すら辞任を余儀なくさせるものであった⁴⁹⁾。1849年の5

44) *СП*, I, стр. 298-299.

45) Гершензон, *Указ. соч.*, стр. 191. *СП*, I, стр. 420.

46) P. S. Squire, *The Third Department*, Cambridge, 1968, p. 170.

47) これはブトゥールリンの死後、メーンシコフに代り「メーンシコフ委員会」と呼ばれるようになる。

48) M. Florinsky, *Russia: A History and an Interpretation*, Vol. II, p. 813, N. Y., 1964.

49) В. И. Кулешов, *Отечественные записки и литература 40-х годов XIX в.*, М. 1958, стр. 270-271.

月には各大学の学生数も300人に制限された上⁵⁰⁾、哲学と形而上学は授業課目から外され、論理学と心理学の講義が神学の教授に委ねられた⁵¹⁾。

この時期の最大の事件は、いうまでもなくペトラシェフスキー派⁵²⁾の逮捕、裁判、シベリア送りであったが、スラヴ主義者の仲間からもユーリー・サマーリンが逮捕・投獄され、この事件を私信に記したイヴァン・アクサーコフも第三部によって捕えられて、訊問を受けている⁵³⁾。グラノーフスキーの言葉を借りるならば、当時の状況は「なにか間違いにでもなりそうな⁵⁴⁾」雰囲気であり、この状況を見る前に「よい時に死んだペリンスキーはよかった⁵⁵⁾」とすらいえるほどであった。

いま見たチャアダーエフのオルローフへの手紙も、このような当時の雰囲気を抜きにしては考えられず、この点ではバーリンの描き方に格別異をとる必要もない。

ところでチャアダーエフは、オルローフへ手紙を書いた直後、ゲルツェン自身につきのような手紙を書き送っているのである。

「モスクワ、1851年7月26日。貴方が私のことをおぼえていて下さり、また私のことを愛してくれている由、耳にしました。貴方に感謝します。私もまたしばしば貴方について考えています。世の出来事が貴方と私とを多分永久に引き離したことは、精神的にも知的にも残念なことです。貴方がヨーロッパのいずれかの国民とその言語に親しくなれば、その言葉で貴方の胸中を表現することができるのでしたら、それはそれでよいことでしょう。貴方が身につけられるとしたら、フランス語が一番よいように思われます。これはすぐれた作品を読む際に十分容易であるばかりでなく、これによっていかなる言語よりも現代のテーマを理路整然と述べ切ることができるからです。しかし貴方は母国語であれほど生き生きと表現された方ですから、貴方にとって生まれた国の言葉と別れることはさぞかし辛いことでしょう。いずれにせよ、私は貴方が手をこまねき口を結んで生きるようなことはあるまいと信じています。そしてこれが肝心な点です。現代のロシア人がコトシーヒン⁵⁶⁾よりも下に立つとしたら恥ずかしいことになります。

かの有名な文章⁵⁷⁾に対しては感謝しています。貴方は遠からずこの同じ人物⁵⁸⁾について、さらに数言かたる時がまいりましょう。その時は勿論だれもが知っている周知の真理についてではなく、共通の思想について語って下さい。そうすればこの人物は、人びとがそれに抗して立ち上った迫害の例としてではなく、彼らが何かある感動をもってそれに耐

50) ただし医学部と神学部を除く。

51) A. Kornilov, *Modern Russian History*, N. Y., 1948, p. 305.

52) 拙稿「ペトラシェフスキー派の入びと」、『えうゐ』No. 3 (1976), 2-11頁参照。

53) このサマーリンの措置についてニコライはみずからオルローフに次のような「訓令」を発している。「召喚せよ。読め。訓戒を与えよ。釈放せよ。」cf. Kornilov, *op. cit.*, p. 306.

54) Cf. Quénet, *op. cit.*, p. 372.

55) Kornilov, *op. cit.*, p. 305参照。

56) 17世紀の外交官にして作家たるグリゴリー・コトシーヒン(1630頃-1667)のこと。彼はロシアからスウェーデンに逃れたあと『アレクセイ・ミハイロヴィチ統治下のロシア』を著わし、モスクワ公国の欺瞞、策略とその人民の孤立と無知について語っている。

57) 『ロシアにおける革命思想の発達』の中のチャアダーエフを描いた箇所をさすのであろう。

58) チャアダーエフ本人をさす。

えた一例として、受けとられるかも知れません。もし間違っていなければ前者より後者の方が、はるかに有害な影響を与えるものなのです。どうかこのことを月並なことだと取らないで下さい。もしかするとひどい表現になったかも知れませんが。

多分私は人の世のことについて、そう長く生きた証人として留まることはありますまい。しかし心から来世を信じつつ あの世にあっても現在と同じように貴方を愛し、現在貴方を見ているように貴方を見つづけることでしょう。失礼しました⁵⁹⁾。」

チャアダーエフが何故にこのような時期に、かかる身に危険が及ぶかも知れない手紙をゲルツェンに送ったのか、またこれが検閲にかからずにどのようなルートでゲルツェンの手に届いたかは何ひとつ詳細がわかっていない。しかしここにはチャアダーエフのゲルツェンに対する変らぬ好意がはっきりと示されているし、また先輩としての思いやりすら感じられる。はたして彼がオルローフからか、それとも他の誰かからか、ゲルツェンの著作を借りて読んだか否かも定かではない。もしオルローフへの先の手紙のあとでこの書を読み、そこに描かれた自分の肖像に対してゲルツェンに感謝の意を表明したいと考えたとするならば、話はすっきりするかも知れないが、このことも定かではない。しかしこの手紙の中には彼のオルローフあての手紙よりもはるかに心がこもっていることは読みとれよう。

ゲルツェンが『テレスコープ』に載った『哲学書簡』を流刑地ヴィヤトカでそれこそ「気が狂うのではないか」と恐れるばかりの「強い印象」を感じつつ読んだのは、この手紙より15年前の1836年のことであった。彼はそれより二年前の1834年の7月21日に友人ミハイール・オルローフの家ではじめてチャアダーエフに会っているが、この無署名で発表された『哲学書簡』の著者がすでに面識のあるチャアダーエフだとは、読後数カ月間気が付かなかつた⁶⁰⁾。しかし1842年に再度の流刑からモスクワに戻った彼は、しばしばチャアダーエフを訪問しており⁶¹⁾、翌年6月にサマーリンが学位論文をデフェンスした時にも、またその年の冬から翌年にかけてグラノーフスキーがモスクワ大学で中世史の公開講義を行った時にも、二人はホミャコフとともにそれらを熱心に聞いている。彼ら三人はしばしばモスクワのサロンで会って意見を交換して居り、スラヴ主義と西欧主義が形成されつつあったこの時期に、三人は三様にそれぞれの思想を形作っていったのである。

ところでこの当時モスクワのノーヴァヤ・バスマンナヤ街にあったチャアダーエフの家には、「テレスコープ事件」で一躍有名になったこの人物に一目会いたいと訪れる人びとが少なくなかったが⁶²⁾、その中には外国人の訪問客もしばしば見受けられた。その中にマルミエ (Marmier)、シルクール (Circourt)、リスト (Liszt)、ベルリオズ (Berlioz)、ハクストハウゼン (Haxthausen) といった名士⁶³⁾にまじって、一風も二風も変わった経歴を持つ

59) *СП, I, стр. 299-300.* 後にゲルツェンはこの手紙の全文を『北極星』第5巻, 221頁に収めて公刊した。

60) *А. И. Герцен, IX, 139-141.* 邦訳, 前掲書, 345-346頁。

61) この間の事情はゲルツェンの日記にくわしい。(1842年7月29日, 同年9月10日, 1843年1月8日, 1844年7月9日の項参照)。

62) ゲルツェンはこの情景を生き生きと描いている。*А. И. Герцен, IX, 142-143.* 邦訳, 347頁。

63) しばしばメリメの名もあげられるがカドはこれは事実と反すると否定している。cf. *M. Cadot, Ia*

たアストロフ・ドゥ・キュスティーンというフランスの侯爵がいた⁶⁴⁾。彼は帰国後1843年に『1839年のロシア』と題する旅行記を著わし、自分の目に写った自由なき専制政治の下のロシア社会を描くとともに、巻末に名前こそあげていないが誰もがそれとわかる形でチャアダーエフの『哲学書簡』の内容を紹介した⁶⁵⁾。このキュスティーンの本は一躍ベスト・セラーになり、発売後ただちに売切れ、1855年までに四版を重ねたほか、英語やドイツ語にも翻訳されて、当時の西ヨーロッパの知識人に広く知られるところとなった⁶⁶⁾。そしてこれは政府の禁止にもかかわらず、ロシア国内にも入り込んで、『哲学書簡』と並んでロシアと西欧の本質的相違ををスラヴ主義と西欧主義の両陣営に属する若きインテリゲンツィアに探究させる一つの重要なきっかけを作った⁶⁷⁾。先に述べたところのチャアダーエフが仏訳したホミャコフの『ロシアについての外国人の意見』も、その執筆のきっかけを作ったのはこの書であった。しかもここで重視すべきは、このキュスティーン著作の中に、チャアダーエフの『哲学書簡』が少なからず影響を与えているという事実である⁶⁸⁾。

だとすればロシア政府にとっては、国内でこそチャアダーエフに関する一切の公表は禁止し得ても、国外におけるこのような書物は抑止できなかつただけに、この点についてかなり神経をとがらせていたに違いない。しかしてゲルツェンの『発達』は、かかる外国人の抱いている一面的と思われるロシア観に対して、ロシア人自身によってロシア内部の反体制的思想と運動を紹介する目的で書かれたものであって⁶⁹⁾、それだけにこの中のチャアダーエフ像はデカブリストの蜂起後の暗い時代を代表する思想家として、その「迫害」を強く人びとに印象づけずにはおこなかつた。

このようなゲルツェンによって描かれたチャアダーエフの姿は、その後書かれた『過去と思索』の中のチャアダーエフ像とともに、ニコライ一世時代の愚かしくも暗い専制政治の下で悩み苦しむ、孤独な「殉教者」としての彼の「伝説」を作り上げることになる。これらの中で描かれたチャアダーエフの姿は、たしかにすぐれた描写をされているが、チャアダーエフ本人にとって見れば――もし彼がこれらを実際に読んだと仮定したならばであるが――いささか最届の引き倒しの感があったに違いない。いずれにせよ、先に見たオルロフ伯とゲルツェンへの手紙は、このような背景と経緯があったのであって、バーリンでもこれは十分承知していたに相違ないと思われる。

(III)

しかし本論の冒頭でも述べたように、バーリンがまったく気付かなかつたか無視してい

Russie dans la vie intellectuelle française (1839-1856), Paris, 1967, p. 215.

64) キュスティーンの経歴とロシアへ来た事情については G. F. Kennan, *The Marquis de Custine and His "Russia in 1839,"* Princeton, 1971, pp. 3-29 参照。

65) Marquis de Custine, *Lettres de Russie*, Paris, 1951, pp. 365-367.

66) Quénet, *op. cit.*, p. 293.

67) Christoff, *op. cit.*, pp. 59-60.

68) カドは両者の主張を比較対照して論じている。Cadot, *op. cit.*, pp. 200-203.

69) 本書執筆の直接的きっかけは、ポーランドに同情を寄せ、ロシアを憎悪するフランスの歴史家ジュール・ミシュレのロシア観への反駁であった。その後ミシュレはこのようなゲルツェンの見解を大幅に取り入れ、1854年に出版した『北方の民主的伝説』の中に「ロシアの殉教者たち」なる一章を入れ、その中にデカブリスト、チャアダーエフ、バクーニンなどを扱っている。См. А. И. Ге

る一つの重要な資料が、彼がその論文を執筆する13年前にシャホフスコイによって公刊されていたのであった。もともとこの新資料はチャアダーエフの蔵書の中の1839年にパリで出版された『M. ガヴサン著。インドおよびヒンドスタン文学史』なる一冊の中に書簡用箋に書かれたまま製本され、閉じられてあったものである。たまたまこの用箋が本と同じ大きさであり、且つチャアダーエフの筆蹟があたかも楔形文字に似たひどく読みづらいものであったために⁷⁰⁾、ルミャンツェフ図書館（現レーニン図書館）が製本に出した際、製本工がこれを本の一部として捨てずに閉じ込んだのをシャホフスコイが発見したのであった⁷¹⁾。

これが書かれたのはその内容からも明らかな如く、1848年の二月革命の直後と考えられ、その文章がチャアダーエフ自身の手になるものであることは、単にその筆蹟からだけでなく多くの加筆や削除がなされていることから明瞭である。しかしその文体は彼の他の著作と異なり、あえて民衆の古い言葉や教会で用いられる表現を用いているところに特徴がある。しかしてその全文は以下の如きものであった。

「親しき兄弟たちよ、不運なる兄弟たちよ、ロシアの人びとよ、正教の人びとよ。君たちの耳には届いたろうか、諸国民が立ちあがったということが、農民があたかも大洋の如く、青海原の怒濤の如く、波立ち、揺れ始めた。！ という轟々たる知らせが届いたろうか。遠き土地の、君たちの兄弟たるさまざまな民族が、みずからの皇帝=君主^{ツァーリ=ゴスダリ}に対し、あたかもひとりの人のように一斉に蜂起した。！ という噂が君たちのところまで届いたであらうか。人びとは知っている。皇帝も君主もいない、彼らのいうことなど聞きたくない。彼らは自分たちをながいこと虐げ、奴隷と化し、無理に苦い杯を飲み干させたのだ。天上の皇帝以外のいかなる皇帝も欲しくない、と知っているのだ⁷²⁾。」

この「檄文」を公表したシャホフスコイは、その解説の中で、これが決して冗談に書かれたものではなく、文章の調子からしても、民衆の間に広めようとの真面目な意図の下に執筆されたものであると知っている。さらにまたこれが、チャアダーエフの友人たりし、デカブリストのセルゲイ・ムラヴィヨフ=アポストルが、蜂起の前夜に部下の兵士の前で読んだあの有名な『正教教理問答』を「文字通りくりかえしている」点も指摘している。彼はまたこの中で述べられている思想が、チャアダーエフを知る者にとっては必ずしも驚くに当たらないのだと述べ、そしてその理由として、すでにチャアダーエフは1832年にもその『断章⁷³⁾』の中で「社会秩序とは何か？——それは一時的疾患に対する一時的医薬である。」とか「立法的、政治的、司法的制度等は何のためにあるのか？——それはそれらの制度のもたらした悪の回復のためにある。」といった見解を記しているし、また

риен, VII, 419-421, 438, XII, 540-542.

70) *Литературное наследство*, Т. 24-25 (1935), стр. 681 の写真参照。(以下 Л. Н. と略記)

71) *Там же*, стр. 679-680.

72) *Там же*, стр. 680.

73) これは *СП, I*, стр. 143-160 に収められている。この引用は153頁からのものであるが、これに続いてチャアダーエフは次のように書いている。「フランスにおいては思想は何のために必要か？——思想を述べるためである。イギリスにおいては？——それを実行するためである。ドイツにおいては？——それを熟考するためである。わが国においては？——何の為でもない。！——そしてその理由を君たちは知っているだろうか？」、なおゲルシェンゾンはこの『断章』を1832年ではなく、1829-31年の作品として収録している。

この「檄文」と同じ頃書かれたと推測される「村の司祭の日曜説教⁷⁴⁾」でも、チャアダーエフはあらゆる富をはげしく非難しており、さらに彼が後年書いた未刊の『アフォリズム⁷⁵⁾』の中でも、労働者には文明のあらゆる幸を利用する当然の権利がある、といった考えが見られると主張している。

以上の主張に付け加えてシャホフスコイは、しかしこのことをもってチャアダーエフが将来のロシアにおける革命についてはっきりした見解を持っていたとは考えることはできない。たとえ彼に積極的な綱領があったとしても、それは漠然とした空想に満ちたものであって、その証拠に彼はこの「檄文」を書き上げたあと、それを人目につかないところに隠したのではないか。当時の周囲の状況からしても、この文書が反響を生むことは考えられない、と述べている⁷⁶⁾。

これ以後ソビエトの研究者は、ほぼこのシャホフスコイの線にそった解説をこの「檄文」に与えている。たとえば『ソビエト大百科(第二版)』の記述は以下のようになっている。

「その生涯の晩年においてチャアダーエフは、歴史における人民の役割をより深く理解し、ロシアの人民に向けて檄文すら書いた。そして彼らが西ヨーロッパの諸国民の革命的行動に注目し、ロシア人も彼らの例にならうことをアピールせんとしたのである。しかしチャアダーエフはこの檄文を友人たちにすら見せることなく、自分の蔵書の一冊に仕舞い込んだのであった⁷⁷⁾。」

この点はシュクリノフも同様であって、彼は1960年にソビエトでは久しぶりに発行されたそのチャアダーエフ研究において、この「檄文」をもってチャアダーエフが再びかつての革命思想に戻り、暴力の必要性すら肯定するようになったが、それにも拘らずこの文書を公表する勇気を持ち得なかったところにレーニンの指摘する人民とへだたっていた貴族の革命家の「階級的限界」が見られるとしている⁷⁸⁾。

また近年チャアダーエフの伝記を著わしたレーベヂェフは、この「檄文」をもって「バスマンナヤ街に隠遁生活」を余儀なくされていたチャアダーエフが、依然としてあくなき「真の野心」の発現形態を探究していたことを示す証拠であり、それはまた自分自身でも判然とはしないながらも、個人主義から現実との別の関係へ移らんとすることをうかがわせるものであって、本質的には未来に向けられたものであったと、いささか文学的な解釈を下している⁷⁹⁾。

74) 正しくは『ベルミ地区、ノーヴィ・ルドニツキー村出身の村の聖職者の日曜説教』。これは1918年にゴリーツィンが『ロシア報知』のI-IV号に初めて発表した。Cf. McNally, *Friends*, p. 209.

75) この中でチャアダーエフは「社会主義は勝利するだろう。何故ならそれが正しいからではなく、われわれが正しくないからだ。」と述べている。Л. Н., Т. 22-24, стр. 682. しかしこの有名なアフォリズムの後半は、ニーフオントフによれば「何故なら、その敵対者が正しくないからだ」となっており、いずれが正しいか、目下のところ筆者には断定できない。См. Нифонтов, *Указ. соч.*, стр. 193.

76) Л. Н., Т. 22-24, стр. 681-682.

77) 第47巻13頁。しかし『ソビエト歴史百科』はこの「檄文」について触れていない。

78) П. С. Шкуринов, П. Я. Чаадаев, *жизнь, деятельность, мировоззрение*, М. 1960, стр. 38-39.

79) А. Лебедев, *Чаадаев*, М. 1965, стр. 244.

つぎにソビエト以外の研究者の解釈を見ることにしよう。

まずポーランドのヴァリツキは、1964年に発表された著書の中でこの「檄文」についても触れているが、これをもってチャアダーエフが革命思想の側に加わったと考えることは、あまりにもナイーブな見方であろうといっている。しかしチャアダーエフがツァーリの反革命政策に共鳴せず、自分なりにそれを攻撃せんとしたことは明らかであって、このような態度の変化をひき起こしたものは、1848年の革命における「検閲テロ」を含むあらゆる哲学運動に対する政府の弾圧にあったとし、この48年の革命が、チャアダーエフのロシア観に変化をもたらしたと、即ち彼が1837年に『狂人の弁明』の中で表明した希望を最終的に放棄させることになったと述べている⁸⁰⁾。

一方フランスのルーローは、理想主義と宗教的感情とキリスト教的価値とを担った1848年の革命が、この革命運動を惹起した思想傾向にきわめて近かったチャアダーエフの心を大きくゆさぶったに相違ないという。そしてこの「檄文」は、かかるチャアダーエフの自由思想と宗教思想の合体の結果生じたこの地上に神の御国の到来が近いとの信念を示しているように思われると解釈している⁸¹⁾。

このようにこの「檄文」の解釈はさまざまであるが、現在までのところこの点についてもっとも詳細に論じているのは、アメリカのマックノーリーであると思われるので、以下彼の主張を簡条書にしてみよう。

(1) ソビエトの学者⁸²⁾がいうように、先のチャアダーエフのホミャコフあての手紙をアイロニーと解釈することはできず、ロシアがヨーロッパの秩序を回復し、文明を擁護すべきだという点では、チャアダーエフはホミャコフと同意見であった。(2) チャアダーエフもホミャコフも、いまや西欧は政治的指導者としては老衰しており、1848年の革命はこのような西欧の政治的失敗を証明するものであって、政治的未來は若きロシアにこそ属するものであると考えていた。(3) チャアダーエフはその生涯において、多くの問題に対するみずからの見解に変化を見せており、一貫していない。これは彼が真理を把握していないことを示すと同時に、人間的であることを示すものである。チャアダーエフもまた1848年の革命に直面した多くの自由主義者に共通する内面的危機を経験したものである。ネミエはその著『1848年——知識人の革命⁸³⁾』の中で、特に西欧ではこの革命の過程で上・中流階級が下層階級の要求に対してすみやかに興味を失っていったことを一般的に述べているが、チャアダーエフの場合もこれに適合する。(4) しかし民衆軽視という点ではチャアダーエフは一貫している。彼が歴史的役割という点で重視するのは、モーゼとかダヴィデとかマホメットといったカリスマ的人物であり、ロシア史の上ではピョートル大帝やアレクサンドル1世であった。チャアダーエフはグラノーフスキーやスタンケーヴィチと同

80) A. Walicki, *The Slavophile Controversy: History of Conservative Utopia in Nineteenth-Century Russian Thought*, translated by H. Andrews-Rusiecka, Oxf. 1975, pp. 112-113. (本書のオリジナルなポーランド語版は1964年に出た。)

81) Rouleau, *op. cit.*, pp. 20-21.

82) ここで、マックノーリーが主として取り上げているのは、以下の論文であるが、筆者はこれを参照することができなかった。Ф. Н. Берелевич, “П. Я. Чаадаев и революция 1848 года.” 《Учёные записки МГУ, вып. 61, История, Т. 2》(1940).

83) Sir Lewis Namier, *1848: The Revolution of the Intellectuals*, London, 1944.

様、ひっきょうデモクラットではなかったのであって、この点でソビエトの研究者が主張するようにこの「檄文」をもって、晩年のチャアダーエフが歴史における人民の役割をより深く認識するようになったというのは明らかに誇張である。チャアダーエフはむしろ大衆の蜂起を恐れていたのである。(5) シャホフスコイが述べているように、この「檄文」には日付も署名もなく、またチャアダーエフがこれを誰か他の人に見せた形跡すらない。「檄文」を考えるに当ってはその内容だけでなく、それが書かれた状況を重視する必要がある。この点でこの文書は「村の司祭の説教」とあわせて考察しなければならない。これら二つの文書は、古い教会用語を使って、細心にして且つ単純な文体で書かれている。これら二つの文書はともに、もしロシアの正教の牧師が社会主義に魅せられたらどうということになるか、についての予言的警告のように思われる。すでにドゥ・メーストルは「大学のプガチョーフ」の危険について指摘したことがあったが、チャアダーエフもまた、教養のないロシアの田舎司祭が社会主義を説く可能性を警告したように思われる⁸⁴⁾。

以上においてこの「檄文」をめぐるさまざまな解説を紹介してきたが、以下においてこれの執筆の動機と内容についての筆者の意見を記すこととする。

まず執筆の動機であるが、これが1848年の革命のニュースにもとづくものであることは筆者も否定しない。しかしシャホフスコイやマックノーリー⁸⁵⁾さえもが指摘するようにこれをもってデカブリストのセルゲイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの『正教教理問答』と「ほとんど同じである」とし、その延長においてとらえる見解には、必ずしも賛成できない。

たしかにチャアダーエフはセルゲイとその三歳上の兄であるマトヴェイとはすでにセミョノフスキー連隊時代からの知己であって、とくに兄の方とは親しく、彼が1823年に外国旅行に出発するに際してマトヴェイはわざわざクロンシュタットまで見送りに来てくれた二人の友人の一人であった⁸⁶⁾。一方弟のセルゲイはデカブリストの南方結社においてベステリに次ぐ指導的地位を占め、統一スラヴ結社との合併にも努力し、ベステリが逮捕されたあと結社の蜂起を指揮し、他の四人の同志とともに処刑された人物である。

ところで問題の『正教教理問答』はセルゲイが同志バストゥーージェフ＝リューミンの協力を得て作成したものであって⁸⁷⁾、その目的とするところは教育のない農民出身の兵に革命的宣伝を行うことであった。これは14カ条の質問とそれに対する回答から成っているが、その内容は、神はもともと人間を自由にして幸福になるよう創られたにも拘らず、ツァーリがこの神の意志にさからって自由を奪ったところにロシアの民と兵の不平等がある。さればロシアの民と兵はかかるツァーリの暴虐に対して武器を執って立ちあがるべきである。すべての者にとって地上にも天上にも唯一のツァーリしかありえない。それはイエス・キリストである、というものであった⁸⁸⁾。

たしかにこの『正教教理問答』は教会用語を用いている点でも文体の上でもチャアダー

84) McNally, *Friends*, pp. 205-213.

85) *Ibid.*, p. 210 n.

86) 拙稿、『スラヴ研究』No. 8 (1964), 136頁参照。

87) *Избранные социально-политические и философские произведения декабристов, Т. II*, М. 1951, стр. 528.

88) *Там же*, стр. 191-193.

エフの「檄文」に近く、また内容的にも天上と地上の唯一のツァーリたるキリスト以外いかなるツァーリをも認めないという点でよく似ている。しかし両者を比較して、シャホフスコイやマックノーリーがいうように「文字通りくりかえしている」とか「ほとんど同じである」ということはできない。

ところで1848年の革命に際しては多くの「檄文」が書かれ、とくに1848年の夏にはポーランド、リトアニア、バルト諸県において農民に蜂起をうながす幾多のアピールの出たことが知られている。そしてその中には「兵士の教理問答」と呼ばれるところの、皇帝や諸侯の権威を否定し自由をかち取るために革命を呼びかけた檄文もあった⁸⁹⁾。そしてこの文書は1848年6月には大蔵省の通商部を通して第三部長官たるオルローフの許に届けられており、皇帝ニコライもこれを見ている。この文書を紹介したニェフォントフは、1848年の革命のニュースはさまざまな形でかなり詳細にロシアの人びとに伝わっており、非合法のルートによるものだけでなく首都の新聞すら時として国外のニュースを読者にくわしく報じていたと述べている。このことからして筆者には、「檄文」執筆の直接的動機としては、たまたまチャアダーエフが伝え聞いたこれらのアピールの線が強いように思われる。さらにまたその執筆の真意については、シャホフスコイやマックノーリーとともに、ひそかに作製し、他の誰にも見せることがなかった点を重視すべきだと考える。

チャアダーエフがみずからの慰めとして書いた文学的作品の範疇に入るものとしては、先に述べた『断章』や後年の『アフォリズム』があるが、とくに筆者が問題にしたいのは、ほぼこの頃書かれたと推測される書簡体の掌編⁹¹⁾である。この荒唐無稽な作品の内容は故アレクサンドル皇帝に対し、チャアダーエフが実名で失われた外套（それはその後、点火夫によって発見され、彼から警視総監の許に届けられたが、総監は木曜迄は外套の返却は許されないという）の返却を願い出たもので、その主人公はあたかもゴゴリの『外套』のアカキー・アカキーヴィチや、ドストエフスキーの『貧しき人びと』のマカール・ヂェーブシキンを彷彿とさせるものがある。このいわば即興的作品も、他のだれにも見せられることなくしまいこまれていたが、これなどを読むとゲルツェンが描いた孤独な殉教者の姿とはほど遠いチャアダーエフの別の一面が浮かびあがってくる。

以上からしてこの「檄文」は、1848年の革命期に出されたアピールに触発されて、彼がいわば即興的に書いた一つの「文学的作品」と考えるのが当たっているように思われる。しかしてその内容に関していうならば、キリスト以外にこの地上にはいかなるツァーリも要らないというその主張に『哲学書簡』以来一貫して変らなかった彼の基本的姿勢が見られる。しかしこの内容をより詳細に検討するためには、この時期に彼が書いた二通の手紙、即ちチュッチェフにあてたものとシルクールにあてた書簡とを見る必要がある。なぜならばこれらの手紙の中にこそ1848年の革命に対するチャアダーエフの基本的見解がもっともよく出ているからである。しかしその前に彼の私生活について、二、三触れておくこともまた必要であろう。

89) Нифонтов, Указ. соч., стр. 96-97.

90) Там же, стр. 98.

91) この全文は Лебедев, Указ. соч., стр. 235-236 にある。

(IV)

チャアダーエフが「檄文」や上に述べた書簡体の掌編を書いていた1840年代の末から50年代のはじめにかけて、彼が今度は本当に発狂したという噂が広く流れた⁹²⁾。先に見た1851年のゲルツェンへの手紙には、自分がもはやこの世にながく生きながらえることはできないだろうとの予感が見られるが、彼の健康は1845年以来悪化の兆しをみせており、「肉体的にもまいっているが、それ以上に精神的にひどくまいっている⁹³⁾」状態が続いた。チャアダーエフは1847年以来、時として自殺まで考えるようになったと伝えられるが⁹⁴⁾、これは単にゲルツェンゾンのような単なる神経症に由来するものでなく、この時期に彼が当局から受けた何らかの警告と無関係でないことが察せられる⁹⁵⁾。

さらに1848年にはロシアの町や村にコレラが猖獗をきわめた。これは大都市においてとくにひどく、この年ペテルブルグでは22,000人が罹患し、そのうち12,228人が死亡しており、モスクワでは16,250人がかかって、8,000人以上が死んだといわれる⁹⁶⁾。翌年8月に兄にあてた手紙の中でチャアダーエフは「コレラが流行していたあいだ、私はいつもそれにかかるのではないかと感じ、自分の生命を考える上でいかなる救いも望むことができませんでした。」と記し、さらに先に死んだ友人ミハイール・オルローフに触れて、「私の目の前で、実際に私の腕の中で死んだ故オルローフの運命を自分自身に隠し通すことはできません。」とも述べ、兄に後事を託している⁹⁷⁾。

経済的にも彼はひどい状態にあった。この頃彼が兄にあてた手紙⁹⁸⁾は、その大部分が借金で首が回らぬことと、兄からの送金を訴えたものである。当時彼はこの兄から父の遺産の分け前として四カ月毎に2,334ルーブリ50カペイカ(銀になおすと667ルーブリ)の仕送りを受けていたが⁹⁹⁾、これは彼の必要を満たすためには程遠く、1849年7月1日付の兄への手紙の中で、彼は多額の借金を抱え込み、その支払いのためにどうしても9,000銀ルーブリが必要だと書いている。

このように1848年の革命はチャアダーエフにとって、肉体的にも精神的にも、また経済的にも行きづまった状態に訪れたものであったといえよう。「テレスコープ事件」以来、当局に目を付けられていた彼が、1842年に当局の命令でモスクワを去って伯母の領地にしばらく引きこもっていたことも新しい資料からわかっている。さらに彼がしきりと自殺を考えていた1847年の夏ごろに当局から何らかの警告を受け取ったこともマックノーリーが明らかにしている。この年8月7日に彼は甥のジハリョーフにあてて、「昨日私は一

92) McNally, *Friends*, p. 50.

93) *СП, I*, стр. 279. (1847年シャホフスコイあて手紙)

94) Гершензон, *Указ. соч.*, стр. 188.

95) McNally, *Friends*, p. 49.

96) Нифонтов, *Указ. соч.*, стр. 23. (これはペテルブルグでは20人に1人がコレラにかかって、36人に1人が死んだことを意味する)。

97) McNally, *Friends*, p. 51.

98) 1845年から1856年迄の間に兄あての20通以上の手紙が、ゲルツェンゾンの著作集に収められているが、マックノーリーの研究を見れば、このほかにも多くの未刊の手紙があることがわかる。

99) Гершензон, *Указ. соч.*, стр. 188. もっとも、この兄からの仕送りは必ずしも確実に履行されたわけではなく、一方、ジハリョーフによれば、チャアダーエフの借金の手紙には作り話も多く、しかも借りた金を返さないことがしばしばあったという。Cf. Quénet, *op. cit.*, 376.

篇の通信を受け取った。時がたてば、これが誇張なしに、真の死の通達にあると考えられるようになるらう。」と記している¹⁰⁰⁾。チャアダーエフが本当に発狂したという噂も、このような状態のもとに広がったものであった。

(V)

チュッチェフが外交官としてその22年におよぶ外国生活からペテルブルグに戻って来たのは1844年の秋であった。すでにドイツにおいて、かつてチャアダーエフも訪問したことのあるシェリングと知己になり、詩人ハイネとも親交を持つ彼は、この年アウグスブルグの《Allgemeine Zeitung》に同誌の編集長である「ギュスターヴ・コルプ博士への手紙」と題する論文を発表し、先に紹介したキュスティースの『1839年のロシア』を真向から批判するとともに、ドイツの統合の障害としてロシアの外交政策を攻撃しているドイツの自由主義的ジャーナリズムに反論しつつ、西ヨーロッパの革命的原理に対抗するものとしてのロシアの専制政治の歴史的正当性を擁護したのであった¹⁰¹⁾。ペテルブルグに居をかまえて以来の彼は、「サロンの獅子¹⁰²⁾」として首都の社交界にその雄弁と博識をもって鳴り、モスクワのチャアダーエフと並び立つ存在となった¹⁰³⁾。これ以来彼の許を訪れる文学者は数を増し、その中にはイワン・ツルゲーネフ、レフ・トルストイ、ドストエフスキー、ゴンチャロフ、ピーセムスキー、イワン・アクサーコフ、フェート、マーイコフなどの名があげられる¹⁰⁴⁾。

まもなく彼はチャアダーエフとも文通を始めるようになるが、1847年4月13日の手紙ではチャアダーエフの健康を心配し、夏に外国へ旅行（とくにドイツの温泉地へ）することをすすめている¹⁰⁵⁾。これに対しチャアダーエフは5月10日付で返事を書き、モスクワの思想界の最近の状況（ゴーゴリの『書簡』やホミャコフとグラノーフスキーの論争についてなど）を知らせるとともに、みずからの友情を披瀝している。しかしこの手紙の末尾でもチャアダーエフは健康の不調を訴え、もはや自分の余命はながくないだろうから、もしチュッチェフがモスクワに来るなら、できるだけ急いでくれるよう頼んでいる¹⁰⁶⁾。

ところでわれわれが問題にせんとする手紙は、この一年あと1848年の多分7月に書かれたと推測されるものである。しかるにこの手紙はチュッチェフの未刊の論文『ロシアと革命¹⁰⁷⁾』のコピーを読んだ直後に、これに対する返事として書かれたものであるので、まずこの『ロシアと革命』の中におけるチュッチェフの主張を知る必要がある。それを簡

100) McNally, *Friends*, p. 47, 49, 50-51.

101) Ф. И. Тютчев, *Полное собрание сочинений*, изд. 7^{ое}, (Спб. n. d.), стр. xx, 519-541.
R. A. Gregg, *Fedor Tyutchev, The Evolution of a Poet*, N. Y. and London, 1965, pp. 14-15.

102) これはヴィヤーゼムスキーの言葉である。 *ibid.*, p. 16.

103) Quénet, *op. cit.*, p. 342.

104) *Русские Писатели, библиографический словарь*, М. 1971, стр. 653.

105) Ф. И. Тютчев, *Стихотворения, Письма*, М. 1957, стр. 393-394.

106) *Л. Н.*, Т. 19-21, стр. 287-288.

107) この論文はロシア国内では印刷されず、1849年6月にパリで出版されたが（原文はフランス語）、すでにコピーの形でそれ以前に、広く読まれていたといわれる。 Cadot, *op. cit.*, p. 262, n. 68. Quénet, *op. cit.*, p. 348.

条書にすれば以下の如くである。

(1) ロシアと革命はヨーロッパにおける唯一の真の力であって、「一方の生は一方の死である。」しかして全人類の今後数世紀におよび全政治的、宗教的生活はこの最大の戦いの結果にかかっており、全人類がその証人である。

(2) その理由は、ロシアが何よりもキリスト教の国であるのに対し、「反キリスト教の精神こそが革命の精神」だからである。しかしてロシアがキリスト教国であるというのは、単にロシア国民が正教徒だからというのではなく、キリスト教の倫理的本質を意味する「自己犠牲と自己放棄の天分」とを持っているということの意味する。

(3) いまや崩壊に瀕しているドイツも、国内の諸民族の脅威を受けているオーストリアも、また計算によってか確信によってか革命を肯定しているカトリック教会も、いずれもが革命に打ち克つことはできない。それができるのは、ひとりロシアだけである。

(4) しかしてロシアは革命に勝利するだけでなく、そこから利益を得ることができるであろう。なぜなら革命はまずオーストリアやハンガリーの軛からスラヴ民族を解放することになるからである。フス派の信仰の中に民族的生命を結集してきたボヘミヤは、ドイツの支配に対してもローマ教会の横領に対しても抵抗を続けてきた。この光榮あるたたかいがチェコ人と東方のスラヴ人の兄弟とを結びつけることになるろう。しかしフス派の宗教は「古き信仰」への復帰の不完全にして歪められた表現と理解されるべきものであって、ここにポーランドとボヘミアの根本的相違がある。ポーランドのカトリシズムは決して無理強いされたものではなく、西欧を狂信的に信じているこの国はつねにスラヴの同胞を裏切ってきた。しかしてボヘミアのチェコ人について、セルビア人、クロアチア人、スロヴァキア人、トランスシルヴァニア人、そしてカルパチアの小ロシア人やダルマチアのスラヴニア人まで解放をめざして起ちあがるであろう。これらのスラヴ人たちはその茅屋にすらロシア皇帝の肖像を飾っている正統なる正教徒である。

(5) 革命のプロパガンダとカトリックの宣伝は必ずや失敗に終るであろう。そしてその時こそ「正統なる君主にして東方正教会の皇帝」たるロシアのツァーリが、これらすべてのスラヴ人を結集するであろう。シャルマーニュ以来のヨーロッパ、ウィーン会議以来のヨーロッパは、ローマ教皇領も西ヨーロッパのすべての王国も、カトリシズムもプロテスタンティズムも、より巨大となったこのロシア帝国¹⁰⁸⁾を前にしては、「ノアの箱舟」のただよすがが如く見ゆることであろう。このロシアの使命を誰が疑うことができようか？¹⁰⁹⁾

このようなチュッチェフの主張に対して、チャアダーエフはつぎのような屈折やアイロニーを含んだ長文の手紙を書き送った。

「たったいま現在の諸事件に関する 貴方の興味ある論文を通読したところです。まず初めに私が喜びをもってこれを読んだことを申したいと思ひます。次に、このことにあえて一言付け加えることをお許し下さい。貴方がきわめて正しく指摘されたように、いかにも

108) チュッチェフはやがて「大ギリシャ＝ロシア東方帝国」の構想を打ち出すようになる。

109) Ф. И. Тютчев, *Указ. соч.*, стр. 542-558. 奇妙なことにこのチュッチェフの激越な文章は、この年12月ケーテン＝ライプツィヒで執筆したバクーニンの『スラヴ民族のアピール』に著しく似ている。バクーニンも世界を二大陣営（革命と反革命）に分け、革命の中にスラヴ民族の解放を呼びかけているが、その中心はロシアである。もとより、そのロシアはニコライのロシアではなく、人民のロシアであるが、『バクーニン著作集』第1巻（白水社1973年、99-134頁参照）。

戦いはもっぱらロシアと革命の間に行われているのであって、現在の問題をこれ以上適切に表現することはできません。しかし正直申しまして、私が驚いたのは、ヨーロッパの識者がこれほど単純なことを、その無数の要求と気ままな本能のために理解することができないということよりも、聖なる思想を有していると信じているわれわれがこのことを十分納得していないということです。しかしわれわれはずい分とながいに聖なる思想を所有してきたではありませんか。それではどうしてこのわれわれが今日まで世界におけるみずからの使命を自覚しなかったのでしょうか？ これは貴方がわれわれの民族の著しい特徴として正しく指摘された、自己放棄の精神そのものに原因があるのではないのでしょうか？ まさに私はこのように考えるようになってきています。そして私の考えでは、このことは事態を本格的に把握するためには特に重要なことのように思われます。

今日われわれが立ち会っている社会的ドラマが、かの伝統的権威と精神的原理に反対して社会を統治せんとする人間理性の不遜なプロテストたる16世紀の宗教的ドラマの直線的延長だと主張するだけでは十分ではありません。しかし当時の識者にあれほど正当に見えるながら、実はこのようなものだったこのプロテストが——それでもヨーロッパの諸民族の全将来はこのプロテストにかかっていたのですが——至高の権威の神的源泉を否定することによってまず最初に宗教思想にアナーキーを持ち込み、ついに社会の基盤そのものをゆるがせたということが間もなく明らかになったのです。われわれはこの大事件に加わることなく、それを目撃していました。われわれは冷静な理性をもって、これを評価することができたのです。われわれはこの中に含まれていた教訓を利用することができ、またそうすべきであったにもかかわらず、何ひとつしませんでした。

悲劇の破局はわれわれの間近で起りながら、われわれに何も教えませんでした。そしてその後ただちに、われわれはこの破局を生んだ思想とそれによって作られた価値を求めて、その発生地へと赴いたのでした。しかし当時国民の心と魂を代表していた素晴らしい人物¹¹⁰⁾が——今日それらを代表して国民の使命を担っている人物¹¹¹⁾と同じように——われわれに代って外国文明の聖地巡礼に出発したその日こそ、われわれの宗教思想の完全な発達が完了した直後だという事実注目して下さい。けだしそれは総主教制の設立された翌日¹¹²⁾に起ったことだからです。

神の恩寵によりわれわれはこのつまらない文明の貧弱な外面だけを持って帰りました。われわれは有害な科学のくだらぬ産物だけを持ち込んだのであって、文明そのもの、科学そのものは全体として、われわれにとって無縁なものとして留ったのです。しかしそれでもわれわれは、ヨーロッパ社会の本質とわれわれの住むこの国の本質との深い相違を判断し得るに十分なだけ、ヨーロッパの国々を知ったのでした。この相違を熟考するならば、当然われわれはみずからの諸制度に高い評価を与え、より深くそれらに愛着を感じ、われわれの社会組織が立脚するところの諸原理の力と同時に、自分自身の制度の優越性を確信

110) ビョートル大帝をさす。

111) ニコライ1世をさす。

112) モスクワに総主教制が設立されたのは1589年のことであり、ビョートルが外国旅行に出発したのは、それからほぼ一世紀たった1697年のことである。なお、ビョートルは1721年に総主教制を廃止し、それに代って宗務院を創設した。

すべきでありました。われわれはみずからの伝統や慣習や信仰や内的生活の表現の中に、また社会的生活の現われの中に、否、われわれの偏見の中にすら——一言に申すならわれわれの民族的生活を構成するすべてのの中に、発展にとって不可欠な諸条件を、無限の完成のためのあらゆる源泉を、限りなき未来のためのすべての萌芽を探し求めるべきだったのです。しかしこのようなことはありませんでした。まったくそれとは反対に、われわれは異国の文明と接触したその時から、みずからの古き土着の思想を性急に拒否し、すぐさま古き習慣を変え、みずからの尊敬すべき伝統を忘れ、昔からの諸制度が次から次へと覆えるのを平然として眺めていたのです。われわれは自分たちの過去のほとんどすべてを放棄し、わずかに宗教上の信仰のみを保持したのです。しかしわれわれの社会的生活のもっとも内奥を構成するこの信仰は、われわれを異国の文明のきわめて質の悪い諸原理からわれわれを守り、それから発するこの上なく不健康な息吹から保護してくれるためには十分でしたが、地上の諸民族の間でわれわれが果すべく運命づけられた役割の自覚をわれわれ自身の中に発達させるためには無力でありました。

かくて異国の文明の輻の下に服従しつつ、それでもわれわれは父祖の勇敢さと、彼らの恭順の精神と皇帝への献身と、彼らの自己犠牲と自己放棄への愛着心とは維持したのです。しかし同時に、神の御手によってわれわれの魂の中に入れられた思想がわれわれの魂の中に成熟することはありませんでした。この偉大なる思想をまったく自覚することなく、われわれは日毎ますます新しい影響に屈服し、再び世界を震撼させた新しい大変動が始ったとき、われわれはそれを利用することもなく、われわれが幸せにも所有していた社会的存在としての優越性を示すことは、またしてもなかったのです。しかしてこの優越性こそは、神がわれわれの心を満している深い信仰とみずからの信仰の純粹性に注目するようわれらに与え給うたところのものだったのです。もろもろの出来事がわれわれの眼前で世界の課題をいわば説明し、われらのために用意された高き使命を明らかにすればするほど、われわれがそれらを理解しなくなったというのは驚くべきことです。われわれが半世紀にわたって目撃したすべてこれらの革命が、それらが起った国々の状態をわれわれに解明しなかつただけでなく、われわれ自身の国の状態をも明らかにすることもなく、単にわれわれの自覚を曇らせたことは明らかです。しかして、もし現在の国民的原理へのある種の覚醒や、われらの父祖の幸を形成し彼らの剛毅さの源泉となった古き伝統へのある種の復帰がわれわれの間で多少とも明瞭に現われてきているとしても、この現象は単に時機が熟したからであって、現在のところはもっぱらこの国がいままでまったく知らなかった歴史を探究したり、文学思潮を研究するという性質だけを持っているものです¹¹³⁾。」

しばしばチャアダーエフはその書簡において、相手の表現や言い回しを用いながら、一見それに賛成するように見せかけつつ、屈折した形で自分自身の主張を述べているが、この手紙などはまさにその典型的な一例である。『哲学書簡』も『狂人の弁明』もそうだが、チャアダーエフの体系的でない、ニュアンスの多い書簡形式の主張を簡単に要約することは十分注意を要するが、それにもかかわらず、この手紙の中で彼が主張せんとしたことを以下に列挙してみよう。

113) *J. H.*, T. 19-21, стр. 589-590.

(1) 西ヨーロッパに起っている現在の革命的事態は、16世紀の宗教改革にその淵源をたどることができる。それは人間理性の名において神の權威を否定し、西欧社会の基盤すらゆるがすものであって、今日西欧社会の蒙っている破局はこれに由来する。

(2) 一方ロシアはこのような西ヨーロッパの動きに参加することなく、また他方ではこの運動の本質的教訓を理解することもなしに、西欧文明の皮相な輸入と模倣とに終止してきた。しかしその原因はチュッチェフやスラヴ主義者がロシアで国民の美德として称える「自己犠牲と自己放棄」の精神そのものの中にある。

(3) たしかにロシアは西欧文明の悪しき影響を蒙ったが、その信仰の純粹性だけは保持してきた。これはロシアが西欧に対して有する優越性である。しかしそれだけに留まり、それ以上ロシア文明と西欧文明、ロシア社会と西欧社会をへだてている大いなる相違を認識し、神がロシア国民に与えられた使命を自覚するまでには至らなかった。しかしこのような自覚は最近になって、歴史研究や文学思潮の研究の形でようやく現われ始めてきている。西欧社会とは本質的に異なるロシア独自の伝統や慣習や信仰を自覚的に検討することこそ、この国の将来の発展にとって不可欠な条件をさぐることにはかならず、無限の未来の萌芽を求めることにつながるのである。

このように要約してみると、一見逆説的に見えるこのチュッチェフあての手紙は、その主張において『哲学書簡』から『狂人の弁明』を経て彼が一貫して主張してきたところであることに気がつく。さらにまたこの手紙は、その内容において、これより二年前の1846年に彼がフランスの友人アドルフ・ドゥ・シルクール伯にあてた書簡の中で述べている主張と著しく近いことにも気がつく。このシルクール伯への手紙はかなり長文のものであって、いまここに全文を訳出することはできないが、それを要約するならば以下の如くである。

(1) ロシアの知性はすべてその宗教的原理に由来するものである。しかしロシアが東方ビザンツ教会から受け継いだ遺産には、純粹性という大いなる長所とともに、世俗的権力への服従から生ずる、自由と社会的発展の欠如という大いなる短所をもあわせ有するものであった。

(2) しかしかかる短所は、ロシア国民の社会的性格にも見られるところであって、ロシア人は温厚にして従順である反面、内面的自発性に欠けている。このことは異民族に国の統治を委ねたというヴァリャーギ招致の時から、また征服によらずして農奴制を生み出したという他の諸国民に例のないこの国民の歴史にあらわれている。

(3) このようなロシアは、未来への発展の萌芽は持っているものの、そのイニシアティブは外国に属する。今日われわれが真剣に自国の歴史を研究しているのは、みずからの未来にとって有益な教訓をそこに見出さんとするからにはかならず、われわれが過去の歴史中に再建すべきものだけでなく、自分自身の誤りやみずからに欠如しているものをも見出し、あえてそれらを告白する日が来れば、その時こそロシアは外国思想の影響から脱却し得たといつてよいであろう。いまやロシアの中にもこのような方向をめざす歴史研究が現われ始めたことは、われわれの時代の名誉となるものである¹¹⁴⁾。

114) *СП. I, с. 268-275.*

先のチュッチェフあての手紙と、このシルクール伯への手紙とを併せ考えるとき、そこに彼の一貫して主張している核心がどこにあるかは明らかである。そしてこれらの主張はチャアダーエフが、『哲学書簡』および『狂人の弁明』において主張したことの延長線上において理解し得るところである。

まず先のチュッチェフあての書簡の第一の要約についていうならば、彼はすでに『哲学書簡』（とくに第六書簡）において、ルネサンスや宗教改革を生み出した近代ヨーロッパの理性万能主義、物質主義を批判し、そこから生まれた近代文明の本質についての誤った理解の仕方を指摘している¹¹⁵⁾。しかしてこのようなチャアダーエフの見解の根底には、人間理性の自律性を認めず、かかる不完全な理性をもって万能と考えることこそ人間の不幸と真理発見の障害となるとの主張があった¹¹⁶⁾（第二、第四書簡）。なぜなら彼は「人間の理性が行動するためにはそれ自身の本性に由来せぬある衝撃をまず最初に受けることが必要であって、この人間の最初の思想、最初の知識というものは至高の原理から奇蹟的に伝達されたものにほかならない¹¹⁷⁾」（第六書簡）と考えていたからである。

このような彼の見解には、ボナルド、バランシュ、ドゥ・メーストル、シャトーブリアン、ラムネといったフランスの伝統主義や、カトリックの歴史哲学が大きく影響¹¹⁸⁾していることは本論の冒頭でも触れた通りである。

このような彼が1830年のフランスの七月革命に対しても、すでに1835年に友人ツルゲーネフへの手紙の中でつぎのような見解を披瀝していることは論理的にも当然であって、これは1848年の革命に対する見解とも本質的には同じといえよう。

「ぼくは、現在君が世界にあの嘆かわしい中庸主義を投じたフランスのすべての泥沼の墳出をどのように考えているかは知らない。ぼくはこのことを日毎ますます残念に思っている。これは世界を半世紀遅らせ、すべての社会思想を完全に混乱させてしまったのだ。いつこれらの思想がもとの静穏に戻るか誰が知ろう。このような判断はこの上なく公正なものだ。なぜならこれは固有の普遍性を持つロシア精神の判断だからだ。ぼくはロシア的知性はきわめて普遍的な知性だと思っている。われわれがヨーロッパの諸事件をよく評価できるのは、われわれが遠く離れているからにほかならない。これは事実だ。歴史的に見るならばヨーロッパとの関係において、われわれは観客であり、ヨーロッパは役者であって、芝居を判断することこそわれわれの仕事なのだ¹¹⁹⁾。」

チュッチェフあての要約の第二の主張については、その前半がすでに彼が『哲学書簡』の第一編以来、くりかえし主張してきた見解であることはいうまでもなからう。しかして後半の主張はシルクール伯への手紙の第一と第二の要約において説明されている。しかしあえてつぎの二点をここで付け加えたいと思う。第一は彼が考えているキリスト教の精神

115) 拙稿『スラヴ研究』No. 9, 56-62頁参照。

116) 同誌 No. 7, 136-139頁, No. 8, 119頁参照。

117) 同誌 No. 9, 43頁。

118) この点については以下の研究を参照。Zenkovsky, *A History of Russian Philosophy*, translated by G. L. Kline, Vol. I, London, 1953, pp. 152-154, 158-162. Quénet, *op. cit.*, 139-163. Walicki, *op. cit.*, pp. 87 以下。McNally, *Friends*, pp. 172-174. 拙稿『スラヴ研究』No. 8, 138頁。

119) *СП, I, стр.* 184.

は、ヨーロッパにおいては原始キリスト教の形でもっとも純粋に現われ、しかして中世において「神の御国」への希求は普遍的な形であられたと『哲学書簡』で述べていることである。このような彼がギリシャ正教の純粋性へ注目するようになったのはスラヴ主義者、とくに友人たるホミャコフとイヴァン・キレエフスキーの影響が強いが、ここで重要なのは、チャアダーエフが一貫してキリスト教の本質をその社会性——社会への働きかけ——に見ており、この点でロシアの正教にイニシアティブの欠如を指摘している事実である。

つぎにこのチュッチェフあての手紙におけるピョートルの評価について一言したい。彼が『哲学書簡』から『狂人の弁明』へとその見解を発展させていった過程において、ピョートル大帝に対する評価の変化が重要な役割を果たしていることはすでに述べた¹²⁰⁾。しかしこのチュッチェフへの手紙では一見して否定的に評価されている。これは彼がキリスト教の純粋性という観点からみると、ロシアにおける正教の信仰は16世紀の総主教制の設立によって——中世のヨーロッパにおけるローマ・カトリシズムの確立と並んで——最高の段階に達したが、ピョートル以後の西欧文明の導入はこのような正教の精神にむしろ有害な影響を与えたと考えるにいたったからであろう。これが一点。つぎに彼がピョートルの改革をもって、それがもはや名目上存在していたものを改革したにすぎず、おのずから建設されつつあったものを建設し、すでに先行者が、成就せんと努めていたものを成就したにすぎないとその見解を変化させつつあった事実も指摘されねばなるまい。このようなピョートル観の変化は先のシルクール伯への手紙にも多少あらわれているが、これがより明瞭な形で主張されるようになるのは1854年に書かれた彼の最後の論文においてである¹²¹⁾。この見解の変化が重要であるというのは、『狂人の弁明』においてロシアの未来の萌芽を「後進性の遅れ」に見た彼が、それでもその未来への第一歩のイニシアティブがピョートルの如き強力な君主に期待していたのに対し、この時期にはむしろロシア社会そのものの中に求めんとするようになりつつあったからである。これが先に見た1848年の革命に対するホミャコフの見解に近いものであることはただちに想像されよう。

最後のチュッチェフへの手紙の要約の第三点もシルクール伯への書簡の第三点と軌を一にするものである。しかしシルクール伯への手紙においては、ヨーロッパのイニシアティブへの期待がより明瞭に述べられている。それではこの期待は二年後には消失してしまったのであろうか？ これを否定する資料が晩年の論文である。この生前最後に書かれた論文の中で、チャアダーエフはロシア史を通じての内面的自発性の欠如をまたしても指摘し、ロシア社会とヨーロッパ社会の本質的相違として、前者における自由の欠如を強調している。ヨーロッパでは「国王も内閣も民衆」もロシアにくらべて全体としてはるかに自由であるのに対し、ロシアにおいては農奴と自由な人間との間には「いかなる相違もない¹²²⁾。」さらに彼はロシアが今日ヨーロッパの諸国民によってより一層憎悪されるようになったのも、この国がヨーロッパのお蔭で強国たりうるようになったことを忘れ、自分の方がより文明化していると居直り、ヨーロッパが蒙った破局を局外者として平然と見ているからで

120) 拙稿『「哲学書簡」から「狂人弁明」へ』。

121) “L’univers, 1854” 《Cahiers du monde russe et soviétique》, XV (3-4), pp. 409-413.

122) *Ibid.*, pp. 412-413.

あるときびしい自己反省の必要を説いている¹²³⁾。

最後にオルローフ伯への手紙、ホミャコフあての書簡、そしていま見たチュッチェフあての手紙に見られる、世界において果すべき「ロシアの使命」について触れて本論の結びとしたい。その際に彼がその『哲学書簡』と『狂人の弁明』において、つぎのような見解を述べていることはまず初めに銘記しておく必要がある。

(1) すべからず人類の歴史的歩みは、この上に「神の御国」を建設するという唯一の目的をめざすものである。したがって歴史とは単なる過去の事実の記録ではなく、このような事実の背後に存する宗教的、文化的意味を哲学的に考察することにほかならない。このように考えるとき、人類の歴史的発達はすべての個人および民族の知的、文化的、宗教的統合と社会統一への希求がその原動力になっているとすることができる。

(2) しかし、かかる人類の普遍的希求は、神が最後の人間の心の中に刻み込まれて以来、過去から未来へと断絶することなく受け継がれ、とくにキリスト教社会においては精神的一家族の共通の遺産となった。キリスト教はすぐれた社会的な力であって、その真の成果はその文明にある。

(3) しかし近代ヨーロッパ社会は、その理性万能主義、物質主義のために、このようなキリスト教文明の本質を歪め、誤った個人主義の泥沼へ落ち込んでしまった。そこにあるのはむき出しになったエゴイズムと虚栄心と党派性である。

(4) 一方ロシアには西欧社会のような、対立する利害や、既製の偏見や慢性的憎悪は存在しない。ロシアが混乱した舞台から身をしりぞいて、より高い観客席から見物し判断することができるのはわれわれの特権である。ロシアは将来、古い西欧社会に生まれた思想を完成させ、多くの社会問題を解決し、人類が取り組んでいる重要な問題に発言するよう運命づけられているのである¹²⁴⁾。

さらに彼は『哲学書簡』と『狂人の弁明』の中間の1832年に執筆した『ベンケンドルフ伯へ』と題するクレエフスキーを代弁した書簡の中でも、以下の如き見解を述べている。

(1) ピョートル大帝によって始められ、その後歴代の君主によって継承された政策はロシアに文明をもたらした。この間西ヨーロッパの思想がロシアに入り込み、時とともに人びとの間に西欧の科学と同じように西欧の政治制度もわが国のモデルとなり得るとの考えが生まれたことは、ある意味では当然のことであった。

(2) しかし政府も国民も、ロシアの歴史的発達がヨーロッパのそれと異なるものであることをよく知らず、したがって西欧の政治制度がロシアの必要に合致するものではないということを、ふかく考えてもみなかった。

(3) ロシアはたとえその文明がヨーロッパに比して遅れをとっているとしても、またロシアの中にヨーロッパの制度の多くの模倣があるとしても、将来において享受すべきみずからの幸せは、自分自身の基盤から引き出すべきである。

(4) 今日のヨーロッパは悲しむべき混乱と無秩序に陥っている。18世紀の愚かしい哲

123) *Ibid.*, p. 413.

124) 拙稿『「哲学書簡」から「狂人の弁明」へ』, 322-326頁参照。

学は人間精神を正しい道から逸脱させ、革命は破壊と流血の原理を広めた。しかるにロシアは君主の庇護の下にあって、現在ヨーロッパを混乱させている動揺から身を守り、みずからの道徳的進歩のために失った時を取り返すことができる。もはや長き旅路を苦しみの中に終るだけの古き社会の運命と、みずからの巨大な未来を実現すべく予定された新しき民族の運命とは区別されねばならない¹²⁵⁾。

以上のようにチャアダーエフの思想の歩みをたどってくると、この「ロシアの使命」の主張もまた「ロシアの未来」への希求と並んで、チャアダーエフの生涯に一貫して存在し続けたテーマの一つであったことがわかる。

1848年の革命に際して示されたチャアダーエフの逆説も、このように検討してみれば「シニカルな自己卑下」とか、ツァーリ政府の「貴族の反逆者に対する執拗な抑圧の効果」を悲劇的に証明するもの」として片付けられてはならないのであって、スラヴ主義の影響をもっとも受けていた時期のチャアダーエフの、スラヴ主義と西欧主義をジンテーゼせんと模索しつつあることを「証明するもの」たりうるものなのである。

(Sapporo, May 10, 1976)

〔附記〕 本稿は文部省科学研究費による研究成果の一部である。

The Revolution of 1848 and the Paradox of Chaadaev

—A Critique on Prof. Berlin's Interpretation of Chaadaev's
Attitude during the Revolutionary Period—

Tsuguo TOGAWA

In his essay "Russia and 1848", Prof. Berlin wrote about Peter Chaadaev's attitude toward the Revolution of 1848 after his letters addressed to Khomyakov and A. F. Orlov. In the former one, Chaadaev wrote to Khomyakov "that Europe was in chaos, and in deep need of Russian help, and spoke with much enthusiasm of the Emperor's bold initiative in crushing the Hungarian Revolution." And in the latter addressed to the head of the notorious Third Department, Chaadaev expressed his annoyance and indignation when he had learnt Herzen's passionate encomium of himself and showed his "sentiments of the most abject loyalty to the Tsar as an instrument of the divine will sent to restore order in the world." In his conclusion Prof. Berlin says that "this act of apparently cynical self-abasement on the part of the proudest and the most liberty-loving man in Russia of his time is tragic evidence of the effect of protracted repression upon those members of the older generation of aristocratic rebels who, by some miracle, had escaped Siberia and the gallows."

However, Chaadaev wrote a letter to Herzen about the same time he wrote to Orlov, and expressed his sympathy with Herzen and even encouraged him. Moreover,

125) *СН, I*, crp. 335-341. 前掲拙稿, 332-333頁参照。

he tried to write a proclamation during the first months of the Revolution, in which he appealed Russian people to rise up against the Tsar. On the other hand, he sent a letter to Fedor Tiutchev around the same time, in which he showed entirely different attitude toward the Revolution. Both those documents—the unfinished draft of proclamation and two letters to Tiutchev—had been published by D. Shakhoskoi in 1935, which Prof. Berlin seems to have ignored when he wrote the above essay.

In order to understand more correctly and concretely the paradoxical attitude of Chaadaev during the revolutionary period, the present author has traced 1) Chaadaev's relation with Khomyakov 2) with Orlov 3) with Herzen 4) with Tiutchev 5) and the evolution of his thoughts after “Philosophical Letters”, “Apology of a Madman” and his letter addressed to Adolphe de Circourt (1846). At the conclusion, he emphasizes Chaadaev's consistency in searching for the way to synthesize “zapadnichestvo” and “slavyanofilstvo.”